

7月25日(木)に北浦史談会と交流会

秋田県唯一の国宝を特別に拝観！

研究発表の共通テーマは「関所」

今回は仙北市「たざわこ芸術村・ゆぼぼ」を会場に開催

秋田県仙北市（旧田沢湖町）の北浦史談会との交歓会を7月25日(木)に開催します。恒例のこの行事も今回で18回を数えます。毎年雫石町と田沢湖町で交互に開催していますが、今年は一昨年同様「たざわこ芸術村・ゆぼぼ」が会場です。

交歓会では毎年両史談会から1名ずつ発表者を選び「研究発表」を行います。今年のテーマは「関所」です。これは北浦史談会の希望で決まったもので、両史談会ではこれまで発表希望者を募っていました。当会では申込み期限までに希望者がなかったため、先の第2回役員会において関 敬一副会長を発表者に指名しました。

国宝の実物を今回の行事のために特別御開帳

研究発表会に先立って行われる「歴史探訪」は、今回は〔仙北市、大仙市「豊川水（すい）神社・**国宝**線刻千手観音等鏡像」を訪ねて〕と題して行われます。北浦史談会によれば、この「先刻千手観音等鏡像」は秋田県唯一の国宝に指定されている文化財で、江戸時代初期の延宝5（1676）年に、豊川地区の原野開拓で水路が掘られた際に野中村の三采女谷地の地下約1.5mのところから発見されました。この鏡は、藤原時代上期の仏教美術を今に伝えるものとして貴重なものだという事です。

水神社は、藩政時代に豊川観音堂と呼ばれた古社です。境内の奥に入母屋流れ造りの本殿があり、厨子に収められた御神体は毎年8月17日に1時間だけ一般公開されます。

【左の写真・水神社】

鏡のレプリカ（複製）は観光客などのために旧中仙町内の施設で展示されていますが、北浦史談会役員の方々が「滴石史談会のために…」と神社に折衝して、神社側が「公開のための祭事を行う」という条件のもとに今回の実物公開に至ったものです。

会員の皆様もぜひこの機会をお見逃しなく。交歓会へのご案内は別途差し上げます。



生森一里塚など史跡の草刈りを実施

七ツ森の旧国道46号沿線にある生森一里塚や仁佐瀬地内の長山街道分岐の道路指導標周辺の草刈り作業を6月16日(日)に実施。8人の会員が文化財愛護の奉仕活動を行い心地よい汗を流しました。

この活動は当会が長年にわたって続けている事業ですが、ここ3年間は町からの当会への補助金対象事業の一つとなっています。次回はお盆の帰省客や観光客を迎える頃に合わせて7月下旬に行う予定です。



6月19日(水)に第2回歴史サロンを開催

小田靖子会員が話題を提供していただきます。

話題 < 渋民小代用教員石川啄木と同校の遠藤忠志校長について >

歴史サロンの持ち方について、5月15日開催の第1回のサロンで「何かしら話題があれば集まりやすいのではないか」との意見が出されました。そこで今回6月19日のサロンでは、かねてからご自身の先祖のことについて資料収集と調査を続けておられる会員の小田靖子(せいこ)さんに上記の話題を提供していただくことになりました。小田さんご自身は「調べもまだまだ途上で、うまくお話しできるかどうか…。むしろ私が会員の皆さんからお聞きしたいことがたくさんあります。」と謙そんしておられますが、興味深いお話が聴けそうです。お時間のある方はどうぞお気軽にご来室ください。

☆☆☆

第2回歴史サロン

日時； 6月19日(水) 午後7時から(8時30分頃まで)

会場； 町立中央公民館 1階 楽屋 (お茶は各自ご用意ください。)

会員の皆さんは歌人石川啄木と雫石との関わりをご存じでしょうか。啄木が雫石に来たという記録はありませんが、3人の雫石出身者が啄木の生活と深い関わりを持っていました。①啄木と堀合節子との結婚の媒酌人となったのは雫石村源大堂出身の洋画家で啄木の盛岡中一年後輩の上野広一でした。②啄木が渋民小学校の代用教員時代、同校の訓導(正式教員)だったのがやはり雫石村源大堂出身の上野さめでした。啄木は上野さめのことを小説「雲は天才である」や歌集「一握の砂」の作品に遺しています。さめは広一の叔母です。③そして3人目、啄木が渋民小学校時代、同校の校長だった遠藤忠志は長山村の出身です。この時に有名なく啄木による校長排斥ストライキ>が起きます。この騒動で遠藤校長は転任、啄木は免職となりました。実はこの遠藤校長は小田(旧姓・上野)会員の祖母マサの兄、つまり大伯父にあたります。—— 小田会員は最近、町内の文芸誌「北雲」に<祖母とその周辺、そして啄木>と題して随想を寄稿しており、その中で遠藤校長や啄木についてのご自身のお気持ちを書いておられます。歴史サロンではこの辺りが話される予定です。

《速報》

雫石町境で“藩境塚”三基を発見！

先にお知らせしているように、今年当史談会では志和公民館とともに、江戸時代に雫石と紫波町境に築造された盛岡藩・八戸藩の藩境塚を探索する事業に取り組むことにしました。そしてその第1回の実地踏査を6月11日(火)に行い、さっそく大村地区の山中で三基の塚を発見(厳密には「確認」が適切?)しました。この日の踏査には志和側から工藤利悦講師を含めて8名、当史談会から関副会長と高橋幸夫会員の2名が参加。雫石側では現地に詳しい大村地区の村田明夫氏、上野満氏、矢櫃地区の高橋博氏に案内をお願いし、今回の発見に繋がりました。

なお踏査の詳細、2回目以降の踏査予定については次号以降の会報でお知らせします。



▲鍵掛峠で確認した藩境塚
築340年を経てもほとんど崩れていませんでした。

2006（平成18）年 啄木生誕120周年企画 北海道新聞

サイトマップ「啄木の風景」…素顔の啄木像

(3) 思想編 より 筆者 桜井健治 氏

時代の行方、敏感に追及

—啄木は、思想面では大きな変化があったようですね。日露戦争の開戦時は、戦争を賛美していたとか。

桜井 日露戦争の宣戦布告は明治37年（1904）2月10日ですが、これに先立つ2月8、9日には日本が旅順を攻撃して戦果をあげています。渋民村でそれを知った啄木は、手放しでその勝利を喜んでいましたね。

さらに、啄木は岩手日報に「戦雲余録」（明治37年3月3日－19日）を断続的に掲載しています。世界には永遠の理想があり、一時の文明や平和には安んずることができないから、文明平和の廃道を救うには、ただ革命と戦争の2つがあるのみだと言い切っています。「今の世には社会主義者などと云ふ、非戦論客があつて、戦争が罪業だなどと真面目な顔をして説いて居る者がある…」と書き、幸徳秋水や堺利彦らをばっさり批判していましたよ。

—ロシアに対する反発も強かったようですね。

桜井 啄木は「露国は我百年の怨敵であるから、日本人にとって彼程憎い国はない」と書いています。しかし、また、「露西亜ほど哀れな国も無い」とも断定しています。日露戦争は、単に満州に対する日本の権利を確定したいということではなく、東洋や世界の平和のために必要であり、ロシアを光明の中に復活させたいと熱望する自由と平和の義戦である—とさえ、啄木は考えていたのです。

—その啄木自身は兵隊検査で不合格となり、入隊しなかったようですが、啄木自身はどう受け止めていたのでしょうか。

桜井 啄木が徴兵検査を受けたのは明治39年（1906）4月21日、沼宮内町でした。しかし、筋骨薄弱で、丙種合格となり、徴集免除となっています。

この日の啄木日記には、「検査が午後一時頃になって、身長は五尺二寸二分、筋骨薄弱で丙種合格、徴集免除、予て期したる事ながら、これで漸やく安心した。自分を初め、徴集免除になったものが元気よく、合格者は却って頗る鎖沈して居た。新氣運の動いているのは、此辺にも現れて居る。四里の夜路を徒歩で帰った」とあります。

当時の時代背景からすれば、丙種合格は、貧相な人間としか見られず、一面では恥ともなりましたが、啄木は持ち前の負けん気で自分の気持ちを処理していたのかもしれない。

いずれにしても、この時期の啄木は、父一禎の宝徳寺住職再任の問題と、啄木自身が渋民尋常高等小学校の代用教員として辞令をもらったばかりでしたので、徴集免除は幸運だったと言えますね。

—その啄木が一転して反戦派に変わりました。どういう経緯があったのですか。

桜井 明治38年(1905)9月5日に講和条約が調印された後、啄木の日露戦争への考え方は大きく変ぼうしました。特に大逆事件が発覚(明治43年6月)した後、幸徳秋水の「平民新聞」を調べ、トルストイの戦争論を書き写しています。

この筆写文に啄木自身が付けた解題が「日露戦争論」というものです。啄木全集に収録されていますが、無造作に戦争を是認し、かつ好む「日本人」の1人だった事を告白しています。そしてトルストイや幸徳秋水らを切実に想起するようになりました。かつてとは正反対の立場ですね。

啄木は、根源的に非戦・反戦の意志を全世界に訴えたトルストイの「日露戦争論」に強い感銘を受けたのです。そしてそれを「明日への考察」(「時代閉塞の現状」明治43年8月執筆)の中で書いているのですが、一社会主義者として、病気と貧困の中で、よりその思いを深めていったようですね。

—「明星」の同人だった与謝野晶子の影響を強く受けたのでしょうか。

桜井 与謝野晶子の「君死にたまふこと勿れ」(「明星」明治37年9月)が、トルストイの日露戦争論への返歌として歌われたという見方もあります。ただ、啄木は与謝野晶子よりトルストイから受けた影響の方が、計り知れないものがあつたと思いますよ。

—トルストイの名前が出ましたが、同じロシアのクロポトキンからも強い影響を受けたようですね。

桜井 クロポトキンは自然学者、地理学者、無政府主義者として知られています。啄木はクロポトキンの自伝「一革命家の思い出」を読み、影響を受けていますね。

「明治43年創作ノート」の末尾に「麵麩(パン)の略取」(幸徳秋水訳)への批判的言及で、評論「性急な思想」(明治43年2月)に、その痕跡を残しています。

また、「明治43年創作ノート」の中でも、「耳かけばいと心地よし耳をかくクロポトキンの書をよみつつ」や「ぢっと手を見る」の歌に、そうした影響の一端が現れています。

さらに、明治44年(1911)1月、瀬川深にあてた手紙の中で、クロポトキンの思想を「必要な哲学」「最後の思想」と評価しています。このころの日記から翌年1月までの日記には「青年に訴ふ」「ある革命家の思い出」「ロシアの恐怖」「ロシア文学」を借用したり、購入した事が記録されています。

さらに「A LETTER FROM PRISON」(明治44年3月)、「平信」(明治44年11月)には、引用や解説もあります。

クロポトキンの著作は、啄木に「相互扶助」の理念を生活の必要として痛感させ、無政府主義の究極の「理想」を啓示することになりました。特に「ある革命家の思い出」や「青年に訴ふ」は、「悲しき玩具」、そして最後の詩作「呼子と口笛」の中の「はてしなき議論の後」にも、重要な役割を果

たしていますね。

—話が少し戻りますが、幸徳秋水が連座した大逆事件を調べて、幸徳の無実を確信していたそうですが、幸徳に関する著述はなにかあるのでしょうか。

桜井 啄木の生涯において、最も大きな影響を与えた日本人の思想家を上げれば、高山樗牛と幸徳秋水の2人です。特に幸徳が執筆した「平民主義」は、啄木に大きな影響を与えたと言えますね。

日露戦争後の社会矛盾が激化していく中で、啄木は日本社会が閉塞していく状況を認識し始めていきますが、クロポトキンの「麵麩の略取」を読み、幸徳の影響を受けました。とはいえ、閉塞状況を打破するために、何らかの行動を起こすところまでは決意できませんでした。啄木は研ぎ澄ました理性で、時代動向を観察することにしましたが、そこに大逆事件が起きたのです。

幸徳の「平民主義」は、啄木の「明日の考察」を執筆する上で、大きな手がかりを与える事になりました。評論「所謂今度の事」「時代閉塞の現状」、短歌「9月の夜の不平」などの作品は、幸徳なしでは生まれなかった作品です。

明治44年（1911）1月、弁護士の平出修によって、大逆事件と幸徳を巡る詳細な情報を提供してもらい、その成果は「日本無政府主義者陰謀事件経過及び附帯現象」そして「A LETTER FROM PRISON」として表現されました。

啄木最後の詩作品「呼子と口笛」は、クロポトキン、そして幸徳秋水がいて初めて生まれたものであり、この手製詩集の口絵は、啄木の幸徳に寄せる熱い共感と敬意が秘められていると言っているですね。

—啄木は、社会主義者の集会にも顔を出していたようですが、啄木自身は運動に身を投じたことはあるのでしょうか。

桜井 啄木の社会主義への関心は、札幌での小国露堂との出会いに始まると言ってよいでしょうね。小国は岩手県の生まれで、明治38年（1905）に北海道に渡り、函館新聞社、札幌の北門新報社、小樽日報札幌支社、釧路新聞社を渡り歩きました。

露堂は啄木に対し、札幌・小樽時代に、社会主義思想・天皇制批判の面で強い影響を与えたといわれ、同郷の岩手県出身ということもあって、親近感も手伝い、意気投合したものと思われま

す。明治41年（1908）1月、小樽で開かれた社会主義演説会に出かけ、終了後の茶話会で西川光次郎と知り合います。

啄木自身としては、社会主義への関心が再浮上するのは天才主義を克服した直後の明治42年（1909）11月ごろで、明治43年2月上旬あたりには、「麵麩の略取」を読み、同年6月の大逆事件発覚とともに、関心は急速に高まり、精力的に社会主義を研究していきます。

6月から7月にかけて、日本語で書かれた社会主義の文献の重要なものは、ほとんど読破したと

推定されますが、こうして蓄積された識見は、さらに続けられた研究と思索の中で熟成し、明治44年（1911）7月の社会主義者宣言（1月9日、瀬川深あてに書かれた書簡の中）に見ることができます。

啄木にとっての社会主義は、彼のそれまでの人生経験と読書と思索との成果を統括すると共に、以後の人生の指針ともなる見地で、この後、啄木は社会主義者としての人生を歩むこととなります。

国内では、右は国家社会主義から、左は幸徳秋水の無政府共産主義まで、多くのバリエーションがありましたが、啄木が選んだのは堺利彦の社会主義、すなわちマルクス系社会主義でしたね。

徹底した個人主義に源を発した啄木の社会主義は、後の時代に登場する全体主義的傾向の社会主義と一線を画しています。個人主義の高い次元における実現をも展望した、批判的精神に富む思想だったと言って良いでしょう。

ただ、啄木はこのように自らの思想構築を進めていきましたが、直接社会主義運動に身を投ずる事はなかったですね。むしろ多くの文献を読破することで、自らの成長を図っていったといえます。そのせいか、啄木自身やその周囲の人が、官憲の弾圧を受けるという経験はしていません。

——ところで、盛岡中学校在学中や渋民尋常高等小学校の代用教員時代にストライキを指揮したりしていますが、当時から社会主義の影響を受けていたのでしょうか。

桜井 啄木が最初にストライキに参加したのは、明治34年（1901）3月25日のことです。この年の初めより、盛岡中では教員の欠員と内輪もめが続き、3、4年の生徒の間に校内刷新の気運が高まり、授業ボイコットに発展しました。

啄木のクラスもストライキに参加しました。しかし、結果的には県知事の裁断で教員の大異動が行われ、28人の教員中、校長以下24人が休職、転任または依願退職となりました。また、生徒の方は、3年生の首謀者1人が4年への進学と同時に諭旨退学となりました。

次のストライキ事件は明治40年（1907）4月19日、啄木自らが渋民尋常高等小学校の代用教員時代に首謀者となりました。高等科の生徒を引率して、村の南端にある平田野に赴いて、校長排斥のストライキを生徒に指示します。

即興の革命歌を高唱させて帰校し、万歳を三唱して散会しますが、この問題は紛糾し、村内は騒然となります。翌4月20日、遠藤校長に転任の内示が出されますが、啄木にも4月21日付で免職の辞令が出され、失職しました。

いずれのストライキ事件も、啄木がまだ社会主義思想に関心を持つ以前の出来事であり、その影響は受けていません。

むしろ啄木の心の中では、常に反逆精神、あるいは劇的行動に走りやすい心理があって、具体的にそれが現れたと見て良いのではないのでしょうか。

〈おまけ。(8) 借金編

—啄木はこれらの借金のうちどの程度を返済していますか。

桜井 啄木がどれほど返済したのかは明かではないのですが、彼は借金するにあたって、こんな心構えをしています。

「自分はまだ世俗にまみれぬ“小児の心”を持った人間である。小児は自らの欲するところを、自らの欲するとおりに無邪気におこなう。自分もまたそうあるべきである。ところで、天才ほど貴い人間はこの世にいない。1人の天才を生み出すために、多くの人々は犠牲になってしかるべきである。自分もまた大詩人となって、その天才を大成すべき人物である。自分と同じく金のなかったワーグナーは、いかにして彼の天才を大成させたか。巨額の借金だった。パトロン、つまりかれの芸術のよき理解者達の援助だった。石川啄木はわが天才を実現するために金が必要なら、その欲するところに従い、小児のようにこだわりなく、金を借りるべきである。よき理解者がいれば、大いに援助してもらうべきである。そして小児のようにこだわりなくその金を遣うべきである」

この理屈は勝手すぎる話ですが、要は天才は金を借りるのはあたりまえ、あるいは援助してもらうのは当然のことだという考え方です。

こうして借金額も大きくなりましたが、「借金メモ」を見る限り、いずれは返済しなければならないという気持ちを持っていたのではないかと、とも思うのですがねえ…。

—次姉・トラの夫、山本千三郎にも随分と無心していたようですが。

桜井健治（さくらいけんじ）

1947年函館市生まれ。70年函館市役所に入り、勤務の傍ら、ライフワークとして啄木研究を始める。著書に『漂泊者啄木と函館』『国際啄木学会誕生す』『箱館奉行・栗本鋤雲』（上下）のほか、啄木関係の共同執筆多数。日本近代文学学会会員、北海道文学館評議員、函館市商工観光部長

2012/7/12 日本経済新聞夕刊

クラレ会長 和久井康明 文

私の祖母、和久井（旧姓金矢）のぶ子は岩手県渋民村（現盛岡市）の生まれ。旧渋民尋常小学校で石川啄木の同級生だった。この小学校から盛岡の高等小学校に進学したのは村長の娘だった祖母と寺の住職の長男だった啄木の2人だけだったらしい。祖母は啄木について「頭が良く、いつも肩を張って歩いていたから少々生意気だと思われていた」と話していたという。

その後、祖母は私立盛岡女学校（現盛岡白百合学園）に入学し、そこで後に啄木の妻となる堀合節子と親友になる。当時金矢家は一族の子供たちを上級学校に通わせるため盛岡に家を構えていて、祖母もそこから女学校に通っていた。同じ渋民の出で盛岡尋常中学校（現盛岡一高）

に通っていた啄木もこの家によく出入りし、祖母を訪ねてきた節子とここで知り合った。

啄木との縁はこれだけではない。16歳で盛岡の中学校を退学した啄木は文学で身を立てる決意をして上京するが、志はかなわず、結核を患ったこともあり、半年足らずで失意のうちに帰郷した。2年後、19歳で節子と結婚し、その翌年、渋民尋常高等小学校で代用教員の職を得る。

この学校で啄木は校長と対立。生徒を巻き込んだストライキ事件を起こして教師をクビになるのだが、一方「ケンカ両成敗」で相手の校長も職を解かれ、後任にまだ20代半ばの若い校長が着任する。これが私の祖父、和久井敬二郎である。

さらに啄木の解任で教員が足らなくなり、補充のため教員採用されたのが祖母。ここで祖父と祖母は出会い、猛烈な恋愛の末、結婚に至る。図らずも啄木が起こしたストライキ事件が祖父母を結びつけた。

故郷の渋民村で啄木は借金を重ねていたこともあって評判が芳しくなかったが、祖父はよそ者で偏見がなかった。祖母を通じて啄木の理解者となり、歌を高く評価していた。1922年、啄木の死後10年が経過し、北上川のほとりにできた最初の歌碑の建立に祖父は尽力した。刻まれたのは「一握の砂」にある3行詩。

やはらかに柳あをめる
北上の岸邊目に見ゆ
泣けとごとくに

1907年 明治40年 満21歳

- 1月4日 京子誕生を「1月1日午前6時出生」として届け出る。
- 1月7日 渋民高等尋常小学校第3学期始業式。同日日記には、「予の代用教員生活は恐らく数月にして終らむ。予は出来うるだけの尽力を故山の子弟のためにせざるべからず。」と記す。
- 1月 函館の同人雑誌『紅苜蓿』（苜蓿社）に「公孫樹」等を発表。
- 2月 『紅苜蓿』に詩（鹿角の國を憶ふ歌）を発表。
- 3月5日 一禎、住職再任の前提である滞納宗費弁済の見通しがつかず、再任を断念して、野辺地常光寺の師葛原対月を頼り家出。再住運動は挫折した。啄木の挫折感も深かった。妻節子は、その母に伴われて、誕生した京子を連れて盛岡の実家から帰ってきた。

- この頃、妹光子も学費に困窮して、盛岡女学校を退学した。
- 3月20日 啄木も北海道での新生活を決意し、函館の苜蓿社の松岡蔭堂に渡道を依頼した。

- 4月1日 代用教員の辞表提出。（岩本武登助役や畠山亨学務委員に留任を勧告される。）

○ 4月19日 高等科の生徒とともに、村の南端平田野において、校長排斥のストライキを指示。村内騒擾。

○ 4月20日 遠藤校長、岩手郡土淵尋常高等小学校訓導兼校長に転任内示。(6月5日付)

● 4月21日 啄木に免職辞令。

● 5月4日 節子は盛岡の実家、母親は渋民武道の米田長四郎方と一家離散し、啄木は、夫が小樽駅長となった次姉トラ宅へ向かう妹光子とともに渋民を出て、5日函館着。

月刊誌「街もりおか」

啄木の交友録【盛岡篇】執筆 森 義真 氏

2011年2月号 (No. 518) ~4月号 (No. 520)

21. 大信田 落花 (2011-2)

落花(本名・金治郎)は、東京の大倉商業学校時代に岩野泡鳴より文学的な刺激を強く受けた。盛岡に戻った落花は、啄木から文芸雑誌「小天地」発行の相談を受けて資金(「委託金」)を援助した。啄木はこの「委託金」を費消したという嫌疑で警察分署長から出頭命令を受け、事情聴取をされた。告発したのは落花ではなく、啄木の父・一禎の宝徳寺再住反対派であり、その陰謀だったと啄木も想定している。啄木の裁判所出頭には、落花も一緒に出頭し証言している。

22. 齊藤 佐蔵 (2011-3)

<おちつかぬ我が弟の／このごろの／眼のうるみなどかなしかりけり> 啄木が「我が弟」と呼んだのは、5つ年下の齊藤佐蔵。渋民尋常高等小学校の代用教員時代に、啄木一家が暮らした齊藤家の跡取り息子であった。明治40年春、啄木が渋民小の生徒らを集めて「ストライキ事件」を起こしたが、当時盛岡中2年の佐蔵は学校側からの要請で仲裁をするために戻った。窓や机を壊す計画だったが、大事に至らなかったのは、佐蔵のおかげであったかもしれない。

26552510

こんばんは。うろ覚えですが、啄木が郷里の村の学校の先生をしているときに、革新的な教育をしようとしたが、古い考えの校長とかの反対にあって、それで村を追われたときいたことがあります。

確かそういう映画もあったような気がします。

＜洋画家・上野広一（1886～1964）が描いた平井大全師の肖像画＞

上野広一氏は明治19年、上野広成の長男として生まれる。同37年盛岡中学を終えて上京。当時洋画界の重鎮山本芳翠の門に入る。

芳翠没後、当時の内務大臣原敬の庇護、後援により同40年渡仏、パリアカデミージュリアンに入学、ジャンポール・ローランスに師事すること5年（同門に安井曾太郎、津田清楓らがいる。）、苦学中のところ、原敬から千円の送金を得て、高名な師について肖像画を専攻。滞仏12年、大正7年帰朝した。滞仏中、1914年のサロンに入選。帰国後は数多くの皇族方や政治家（※総理大臣米内光政ほか）の肖像画や「壁画」（※明治神宮聖徳記念絵画館壁画「条約改正」等が知られている。）

雫石町内では、戦後に描かれた廣養寺先々代の住職平井大全師の肖像画がある。

＜啄木との交友深く、啄木と節子さんとの結婚の媒酌人に…＞

氏は雫石尋常小学校を卒業後、盛岡の高等小学校に入り、一級下の石川啄木と交友がはじまった。盛岡中学時代は、下宿も近かったこともあり親しく浅からぬ関係があった。

特に、明治38年当時身体を悪くして帰省していた氏は、啄木と堀合節子さんの結婚について、両家の間を奔走し、結婚費用の一部まで出して式の準備を整え、啄木の帰省を待ったが、幾日たっても何の音信もなかった。両家からは責められ、節子さんからは泣かれるという板挟みに陥り、方策も尽き6月1日盛岡市帷子小路に移ったばかりの石川家で、花婿抜きで極めて変形の結婚式を挙げさせ、両家の主だつ親戚8人に、氏が媒酌人という格好で列席したことが知られている。

昭和39年10月16日歿、道光院書鑑良照禅居士、廣養寺に葬る。

参考

1901年（明34） 16歳

☆この年のはじめから教員の欠員・内輪もめに対し、3年・4年の生徒間に校内刷新の気運が高まる。

☆2月25日、盛岡中学校3年乙組・丙組の夏井庄六助教諭心得（歴史・漢文担当）と高木一慰教諭（歴史地理担当）に対する授業ボイコットが行なわれる。

☆2月26日、啄木の丙3年級でこの日、富田小一郎担任教諭はボイコットに対する訓戒と説諭を行なう。一方、級長の阿部修一郎は放課後、市内の招魂社社務所に全員集合を指示。ストライキへの合流を決議し、反対者4人を除いて多田綱宏校長に提出する具申書に署名捺印する。

☆2月28日、啄木・阿部修一郎・佐藤二郎の起草した具申書を多田校長に提出。4年生も杜陵館や八幡宮社務所に集合し、排斥教員について協議のうえ多田校長を訪ね、校内刷新を要求した。

☆3月1日、杜陵館で3年・4年合同のストライキ大会を開く。知事北条元利の内命で岡嶋献太郎教諭（英語担当）が出席し、知事の意向を伝達して説得。

☆3月4日、学年試験が始まる（～7日）。3年・4年も試験を受ける。

☆3月30日、修業証書授与式、啄木3学年を修了。成績は平均70点、学年135人中86番と、さらに低下。ストライキ事件は北条知事の裁決によって生徒側の要求が通り、教員28人のうち多田綱宏校長以下24人が休職・転任・依願退職となり、教諭の下河辺藤麿が校長心得となる。富田小一郎は八戸へ転出。生徒側は3年の首謀者及川八楼がひとりだけ4年進学と同時に諭旨

退学となる。

*ストライキ思ひ出でも／今は早や吾が血躍らず／ひそかに淋し

☆4月1日、中学校令の改訂により校名が岩手県立盛岡中学校と改められた。啄木は4年生となる。

(中略)

1907年(明40) 22歳

1月7日、日記に“予の代用教員生活は恐らく数月にして終らむ”と記す。

◇1月、漱石「野分」を『ホトトギス』に発表。

3月1日、“夢想家”の署名で教育評論「林中書」を『盛岡中学校校友会雑誌』第9号に発表。

3月5日早朝、父一禎は宝徳寺再住を断念して家出、青森県野辺地常光寺にあった葛原対月を頼る。午後4時、妻節子が母トキに付き添われ、盛岡で出産した長女京子を連れて渋民に戻る。

この頃、啄木は北海道に新天地を求めようと、函館の文学グループ苜蓿社同人の松岡露堂に渡道について打診。

3月20日、渋民尋常高等小学校で卒業生送別会。遠藤忠志校長は不在だった。

3月30日、終業式。

4月1日、渋民尋常高等小学校に辞表を提出。

4月19日、同校高等科の生徒を指導して遠藤校長排斥・教育刷新の同盟休校・ストライキを行ない、「ストライキの歌」を歌わせる。村内騒然。

4月22日、渋民尋常高等小学校の代用教員免職の辞令を受ける。遠藤校長は転任。

◇4月、漱石が一切の教職を辞し『東京朝日新聞』に迎えられる。月給200円。

◇5月3日、漱石が『東京朝日新聞』に「入社」の辞を発表。

5月4日、一家離散。斎藤福方を出て、母カツを渋民村武道の米田宅に、妻節子・長女京子は節子の実家に託し、小樽駅長を務めていた山本千三郎・次姉トラを頼る妹光子を連れて好摩駅から一路北海道をめざす。父一禎は野辺地にとどまる。

*石をもて追はるるごとく／ふるさとを出でしかなしみ／消ゆる時なし

(吉田仁編 啄木年譜考)

ウェブ 西広島タイムス デーリーニュース (平成12年6月30日No.632号)

7 日本一の代用教員

(六)

啄木にしても父の住職再任の問題があったから渋民にとどまる意味もあったが、父が村を出たいまこの村に住まなければならぬ理由はなくなった。

家出した父はほとんど金は持っていなかったというよりも、持ち出す金がなかったというほうが当たっているだろう。したがって彼は徒歩で野辺地を目指した。東北の三月はまだ寒く雪も深い。彼は早朝家人に気づかれぬように出たのでおそらく食事もしていなかったと思う。好摩駅から北へ

四つ目の奥中山駅付近まで来たがついに力つきて雪中に倒れた。

幸い発見され駅職員の米内謙太郎が啄木の親戚だったのでなんとか野辺地までたどり着くことは出来た。彼が三月五日に家出を決行したのはこの日節子が生後間もない京子連れて帰宅するからであった。ただでも苦しい暮らしにこの上家族が増えては、といった配慮からそうした行動に出たのであろう。

一方啄木は四月には辞職して北海道へ渡る決意をほぼ固めていた。もともと低所得の代用教員に未練のあろうはずはないし、渋民にとどまる理由もなくなった現在、自分を排除しようとするような村から出たいと思うのは当然であった。

だが彼はお世話になりましたと、おとなしく出て行くような男ではない。こうなったらストライキでもしてひと騒動おこして村を出てやる。校長排斥がその理由となっているが、遠藤校長というのは啄木にとってもの足らぬ存在であったとしてもストライキで排除しなければならぬような人物ではなかった。

平野郡視学は、「遠藤校長は郡下でも立派な校長であった」と言い、また同僚の上野さめ教師も「遠藤校長はじめ当時の他の教師を悪者のように見ているのは間違っている」と強い調子で啄木を批判している。こうした証言からもわかるように彼にとっては騒動を起こすのが主目的であってその理由はなんでもよかったのだ。

四月十九日、啄木は高等科の生徒を引率して校門を出た。以下生徒の秋浜三郎によると、

「学校から五、六町のところの平田野に集まりみんなが石川先生をとりまきました。そこで石川先生は、遠藤校長は校長としてたりないところがあるからやめてもらう。それでみんなは学校を三日間休む、それでも校長がやめないときは通知するから、またやすむのだと話しました。そしてふところから出した紙にある『天も怒れば万丈の』というストライキの歌の練習をはじめました。そこへ斉藤佐蔵さんがきて石川先生と、『休むのはよくない』『お前は引っ込め』と大口論になった」「三日休むことにきめて学校に帰り、渋民小学校万歳をさげんで家に帰ったところが、その晩、役場から学校を休んではならないとふれがあったので、翌日はおおかた学校に出ました」。

これがストライキの概要である。

翌二十日遠藤校長は転勤、翌々日啄木もまた免職の処分を受けたが彼にとっては予定通りの結果が出たにすぎなかった。

啄木は代用教員として意欲を持って自己の信ずる生徒の教育指導を実施したことを評価する論者は多い。だが理由にもならないような理由で、しかも自分の都合で純真な生徒を扇動してストライキなどに巻き込むような教師がはたして教育者の名に値するかどうか、はなはだ疑問だと私は思う。

学校と引いては村をかきまわして一応目的を達した彼はよいよこの村での最後の日を迎えた。出るにしてもなんとかして金をつくらねばならぬ。あてにしていた友人からの消息がないので、「我妻は、山路二里、畠山君を訪へり。予は妻の心を思ふて思わず感謝の涙を落しぬ。十二時頃我が夜の物を質に入れて五金をえつ、懐中九円七十銭なり」。そして「啄木、渋民村大字渋民十三地割二十四番地に留まること一ヶ年二ヶ月なりき、と後の史家は書くならむ」とも日記に書き添えた。

参考図書

現代教育 101 選 / 50

「青年教師 石川啄木」 著者 上田 庄三郎

発行 国土社